

(月刊「技術士」通巻524号 平成22年10月1日発行 付録)
この「技術士だより・九州」は、九州支部所属の会員・準会員の方に本誌の付録として送付しております。



技術士だより・九州

(社) 日本技術士会九州支部 秋季号<第85号>(平成22年10月15日発行)



最高技術で建設された建造物の共演 (土木技術の宝庫)

長崎県西海橋公園より一望。手前より西海橋、新西海橋、針尾無線塔。

針尾無線塔；大正11年(1922)に、旧海軍により当時の最高土木技術が投入され、3塔建設された。最大高さ137m、基礎部の直径12.1m、頂上部の直径3.2mという巨大塔である。

西海橋；昭和30年(1955)に竣工し、当時東洋一と言われた鋼アーチ橋(最大支間:216m)である。日本長大橋の元祖とも言える橋で、現在も供用されている。

新西海橋；平成18年(2006)に竣工した。現在の橋梁技術の粋を集め築造された鋼中路アーチ橋(最大支間:240m)で、桁下は歩道になっており眼下に名物の渦潮が見られる。

目次

巻頭言	1	技術情報	11
私の提言	2	私のチャレンジ	12
地域だより	3	賛助会員の声	13
声の広場	5	お知らせ	14
熟練技術士の声	7	本部近況	15
若手技術士の声	8	委員会・部会報告	17
独立技術士の声	9	会員ニュース	22
修習技術者の声	10	賛助会員	23

振れすぎた振り子

九州支部副支部長 深見 一男
(建設・福岡)



毎年8月15日の終戦記念日になると戦争の悲惨さを伝え、二度と戦争を起こしてはならないという内容の番組が目白押しとなる。戦争体験を風化させないため、まだ健在な高齢者に取材が及ぶことも多く、悲惨さが強調される。NHKの「戦地からの手紙」と題するテレビ番組は、例年と比べなぜ日本が戦争に突入しなければならなかったかを比較的詳しく報じており、戦後65年にしてバランスの取れた内容に近づいた気がした。

昭和20年秋生まれの私は、自分の年を確認する必要がない。なぜなら毎年8月になると戦後**年ときちんと報道してくれるからである。戦後生まれのため戦前のことは良くわからない。教科書で習っただけで、高校では「戦後史は大学入試問題としてはほとんど出ない」という理由で、軽く表面を撫でただけだった。

一方で、私の父も親類の叔父たちも軍人として召集され、外地へ出かけた人もいる。中でも昭和17年6月5日、ミッドウエー海戦で撃沈された航空母艦「加賀」の機関士として従軍していた父の弟（当時24歳）は、戦死した。今も父の遺影の横に軍服姿の叔父の写真が飾られているが、端正な顔立ちの中に「生きて帰れないかもしれない」という不安なまなざしが映し出されている。退職後父は、加賀の生き残りの人を訪ねたり、出港地の大分県佐伯市の記念碑を見に行ったりして悲しんでいた。テレビの証言者と同じ姿だった。

南方の戦地から右足に銃弾を受け傷痍軍人として帰国した叔父（本年5月末に死亡）もいた。食料も十分なく悲惨な生活の有様を語ってくれた。また、「進撃中すぐ横にいた仲間が銃弾を受け即死したが、自分は怪我だけで助かり、いち早く帰国できた。一度は死んだと同然の命、仲間のためにも死んだつもりで精一杯生きねばならない」といって松葉杖突きながら、不自由な片足をぶら下げて、農作業や町世話役として動き回っていた。「あの戦争も、欧米各国の植民地政策を踏襲した日本に対して、燃料封鎖しなければ起こっていないのではないか?」ともいい、戦わざるを得なくなった国際情勢や国内情勢などその背景を話した。その時代に生きた人の話は、強い印象を私に与えた。

戦後生まれが半数を超えた今日、戦争の風化は一段と進むものと思われる。21世紀は日本が世界をリードすると評されたこともあるが、今やその地位の低下には目を見張るものがあると感じる。本年4-6月期のGDPはドル換算で中国を下回ったと8月16日の日経夕刊は報じた。世界3位への転落である。急速な円高に加え政策効果にも息切れが鮮明になり、株価も7年ぶりの安値（日経平均一時9100円割れ）となった。デフレの進行、大学は出たけれど就職がない、すさんだ社会事件の頻発、特に子供など社会的弱者に対する近親者からの攻撃は身の毛のよだつ思いである。

どうしてこれまでなってしまったか、戦後、敗戦のためもあり伝統的日本文化、価値観、生活習慣が否定的に評価され、欧米化が急速に進み、中でも集団から個への転換が進んだ。住宅も個室化が進んだ。しかし、個人の悩みに応える社会システムはきわめて不十分である。また、経済的合理性が社会の価値観の中心になり、いわゆる拝金主義が社会に蔓延している。林業、農業、介護など基本的な仕事が評価されない。高齢の親の所在を数十年にわたり把握していない年配の子供たち、「後期高齢者」という言葉もこのような背景と無関係と思えない。生活は格段に便利になったが心の豊かさからは程遠い。

歴史的に日本は、海外から新しい文化や技術の情報を得てはその都度日本流に咀嚼し伝統を守ってきた。民俗学者神崎宣武氏によれば、伝統に誇りを持ち、大切に伝えてきた歴史のあるヨーロッパ諸国にとって、千年以上も独自の文化を培ってきた日本は、文化的に対等な国と認識されているようだ。高度経済成長以降の変化はあまりに大きく、少し急ぎ過ぎではなかったかとヨーロッパの日本文化研究者たちが日本の伝統の消失や変化に危機感を持って心配しているという。ここで日本国を冷静に見つめなおし、あるべき姿に舵を切りなおすべきときが待たなしに来ていると思われる。技術、事務の垣根を越えて有識者は声を出し、行動すべきと考える。技術士もその例外ではないだろう。

伝える技術士、つなげる技術士



大分地区幹事 衛藤 郁
(上下水道、建設、総合技術監理・大分)

今年も8月7日と8日の両日、技術士第二次試験の筆記試験が全国一斉に実施され、福岡会場でも多くの受験者が技術士を目指して奮闘しました。

(社)日本技術士会の総会資料によれば、平成22年3月末日現在、全国で68,546人が技術士登録を行い、国内外で活躍しています。その数は、平成16年度以降、毎年3000~4000名を超えるペースで増加し、今年度の合格者が登録する時点では7万人を超えることが見込まれています。これは、医師の28万人、弁護士の2万8千人と比較しても決して見劣りする数字ではありません。

一方、社会における「技術士」の知名度や認知度はどうでしょうか。昭和32年の旧技術士法の公布以来50年以上が経過した現在でも、一部の社会を除き、医師や弁護士などに比べ、一般には十分知られているという状況にないのが現実です。

では、技術士は社会的にそれほど重要でない資格なのかというと、それは全く見当違いです。天然資源の極めて少ない我が国が、これまで世界の中で重要な地位を占めてこられたことのひとつに技術力の高さがあります。我が国にとって「技術」は国家を支える重要な資源であり、とりわけ科学技術は、国民の安全・安心や豊かな暮らし、自然環境の保全、社会経済の発展を支えてきたことは確かです。さらに、今後、科学技術創造立国を目指していくうえで、技術士法第一条に掲げる、『科学技術の向上と国民経済の発展』を使命とした技術士の責任と役割は益々大きくなると言えます。

(社)日本技術士会では、平成16年6月に「技術士ビジョン21」を策定し、21世紀の技術士のあるべき姿を示しました。また、同会九州支部においても今年度の重点目標として「行動する日本技術士会」を掲げ、技術士としての課題を具体化しています。

これからの技術士は、法や職業倫理の遵守、環境の保全、公益性の確保を前提に、技術と社会をつな

ぐ架け橋として一般社会に認知される必要があります。また、魅力ある技術者資格として位置づけていくことが大切です。さらに、技術者を目指す若者たちに、科学技術の醍醐味とその重要性を伝えるとともに、技術という財産を次世代に確実に繋げていく役割を担っています。そして、我々技術士は、そうするための研鑽と活動を日々怠ってはならないのです。

昨今、小中学校や高校、大学等の教育現場では、いわゆる「理科離れ」や「科学離れ」の問題が顕在化し、技術立国を目指す我が国にとって由々しき状況にあります。これに歯止めをかけるためには、社会における豊富な経験と実績を有する技術士が教育の場に積極的に参画し、科学技術の魅力や面白さをもっと発信していくことが求められます。

最近、「世界一受けたい授業」(NTV系列)や「サイエンスZERO」(NHK教育)等のテレビ番組が各分野の技術者を講師に、実験、観察、体験を交え人気を博しています。これらに登場する講師たちは、各人が現場を知り尽くした専門家です。技術士も、それぞれが高い技術力と創造力を有し、その能力を駆使して社会を持続的に発展させる実践力を備えており、極めて優秀な指導者・講師になり得るのです。

『早く技術士になりたい!』

これは、2箇月ほど前、インターンシップで出会った19歳の学生の言葉です。在学中に技術士第一次試験に合格し、その後、実務経験を積み技術士となり、将来は海外のプロジェクトに参画することで技術を磨き、社会的に信頼され認められる技術者に成りたいと目標を語ってくれました。

私自身、今年、技術士として10年が経ちます。一定の節目の年を迎え、これからは、科学技術と社会の橋渡し役として、また、技術者を志す若者たちとともに、より良い社会の実現を創造していきたいと考えています。皆様も積極的に教育の現場に立ち、科学技術の魅力を伝えてほしいと願っています。

地域だより

福岡

建設技術研究会の活動

支部監事 **鶴島郁之輔**
(建設、総合技術監理)



支部内のCPD活動は支部、専門部会、各地区など多くの構成体によって行われていますがそのひとつとして主として建設系技術士の有志による建設技術研究会(川崎グループと称す)の紹介をいたします。

かれこれ4～5年前でしょうか、数名の有志の意志によりこの会は発足しました。建設産業の疲弊には皆さん心を痛め少しでも役に立つことしよう、そのためには自らが勉強せねばとの思いからでした。

以来、元支部長の川崎迪一さんを中心に7～8名のメンバーが集まっています。

勉強のテーマは参加者が各々にその都度持ちよっ

て、提案者がスピーカーになり資料の説明を行ってその後全員で討議します。

主題の提出解説や討議はまったく自由でそのなかから多彩な考え方や見解が出てきます。一級建築士の方や専門、経歴の異なる技術士ですからこれらのブレインストーミングは味わい深いものがあると自負しています。

最近のテーマを記してみます。

- ・東京国際空港D滑走路建設について
- ・リスクマネジメントおよび契約理念
- ・わが国の鉄道技術の海外展開
- ・これからの建設産業はどうあるべきか

この勉強会は毎月第三木曜日午後三時から五時、支部会議室で行っています。

世話役は吉川技術士、tel/fax 092-643-2136
携帯090-7449-8939

どうか皆さんの参加をお待ちしてます。

密度のある討議が展開されると思います。

もちろんCPD対象としてカウントされます。

佐賀

実務者のための 「佐賀の地質」技術研修会

NPO技術交流フォーラム
大串 正
(建設)



NPO法人技術交流フォーラムは、今年度から5年の継続事業として、「佐賀の地質」技術研修会をスタートしました。

軟弱地盤が厚く堆積する佐賀低平地においては、従前より深層混合処理工法による沈下対策工法が多用されてきました。しかし、全国共通のルールを適用すると、実情に合わないケースが多くなってきたこともあって、佐賀県と当フォーラムは協働でローカルルール策定のための検討会を進めてきました。検討会では特に入念な地盤調査分析の事業全体に与える影響が大きいことも明らかになってきました。

このような中、「佐賀地域の地質(独立行政法人産

業技術総合研究所 地質調査総合センター・以下、産総研と記す)」著者である九州大学・下山正一氏、佐賀大学・日野剛徳氏を招いて実務者のための技術研修会を開催しました。研修内容を以下に記します。

○開催日時と場所

平成22年8月24日、13時～17時、佐賀大学低平地沿岸海域研究センター

○共催

(社)佐賀県県土づくりコンサルタンツ協会、低平地研究会 地盤専門部会

○講演内容

「佐賀地域の地質について」

産総研の最新地盤資料の解説のほかに、地質層序や地層区分を考える場合に地下に堆積する数枚の火山灰層が重要な鍵になることや、秀でた技術者になるためには理学と工学に両面からのアプローチが欠かせないことの重要性などをお聞きしました。



講演の様子

長 崎

長崎地区における 活動状況

長崎地区幹事 **山口 和登**
(応用理学)



各地区における研修活動（CPD対象）については九州各地区においてもご苦労されていると思います。長崎地区においても例外ではなく、研修会の講師選定や参加者確保などで特に苦労しているのが現状です。同じような苦労は技術士会のみでなく、他の学会等においても同様であり、縁あって（社）地盤工学会九州支部長崎地盤研究会の棚橋会長（長崎大学工学部教授）も同じような悩みを持っておられることが伝わりました。この為、大橋代表幹事と共に棚橋会長を訪ね善後策を協議しました。その結果、長崎地盤研究会が主催する勉強会「ジオラボ」を長崎県技術士会が後援し、上記の悩みや苦労を一部共有し、また会員にCPD研修への参加機会を地区において提供しようとの結論になりました。その結果、後援

した第1回目の研修会は8月6日（金）佐世保市山澄地区公民館で開催された第80回勉強会「ジオラボ」で、長崎大学大学院生など約30名（技術士会から10名）参加でした。勉強会の詳細は紙面の関係上省略しますが、①音響トモグラフィによる地盤の可視化（（株）地域地盤環境研究所 九州地盤環境研究所 山内淑人所長）②建設工事と環境保全（ふるさと自然の会 川内野義春副会長）の2題が講演され、地盤工学会の継続教育参加証（ポイント3.5）が発行されました。研修会終了後、20名が参加して懇親会が開催され、技術士会からも6名が参加し意見交換などを活発に行いました。今回は佐世保市で開催（年に1回は佐世保地区で開催）されましたが、今後も長崎市の長崎大学等での勉強会や現地見学会など定期的に計画開催されますので、長崎県技術士会としても後援する予定です。また長崎地盤研究会から技術士会に対し「ジオラボ」への講師派遣なども依頼されており、色々な形で協力の輪を拡げて行くように検討中です。以上のように、技術士会の地域への貢献や、知名度の向上、会員へのCPD研修の参加機会提供などの一助となればと思います。

大 分

大分県技術士協議会発足

大分県技術士協議会担当
室之園泰昭
(建設)



「大分県技術士会」は平成22年5月29日付けで大分県技術士会と大分県技術士協議会との2名称で新たに再出発しました。分離理由は日本技術士会の機構改訂によるものです。

両会の目的は同じで「会員相互の信頼と融和をもとに技術の調査、研究、開発や情報の集積を行い、技術士制度の啓蒙と普及に努め会員の資質と地位の向上を図るとともに、地域における公益に寄与することを目的する」となっています。県内の技術士は、どちらの会に入会するも自由であり県内の技術士92名がそれぞれ入会しています。今後両会員が結束して同じ目的に向かってまい進するつもりです。

今年度の計画

・CPG研修会の実施

毎年大分県測量設計業協会との共催で年4回実施しています。毎回多彩な講師を呼んで1日6時間の研修で席止めが出るほどの好評を頂いています。

・現場研修会

地熱発電所、ダム建設現場、風力発電所等現場見学会を年1回実施してきました。今年度も会員から見学地を募集して、親睦を含めた見学会を実施する予定です。

・大分県「水と生活の調査団」への参加

大分県環境保全課と合同で技術士会より15名参加が認められ、県内の飲用水不足地域の解消の対策、アドバイス等を行ないます。これには各部門の技術士が参加しています。昨年度参加の「小規模集落水問題調査隊」の成果については九州支部より「九州・国際テクノフェア2010」へ出典依頼があり参加します。

大分県技術士会・協議会は、今後会員数100名を越すのは時間の問題であり強い結束力が求められています。また企業内技術士が多いため活動には企業の協力が不可欠です。新しい技術士会・技術士協議会の合同事務局も立ち上がり会員相互の親睦と情報の交換、技術の向上など推進していきます。

月例実務研修会

～コンサルマンのスキル
アップを目指して～

盛永 保弘
(農業・佐賀)



1. はじめに

私は、技術士になると同時（平成16年5月）にNPO法人技術交流フォーラムに入会しました。当フォーラムは、前身が任意団体の「佐賀技術士会」で、ボランティア活動が続ける中で「法人化」の必要性を痛感したということです。そこで、活動の幅を広げる意味もこめて、佐賀技術士会を解散し、代わって当フォーラムが平成13年10月に創設されました。

現在、私は当フォーラムで「研修委員長」をしています。研修委員会の活動内容は、大きく2つあります。一つ目は、PE道場・RCCM道場の運営で、二つ目は、当フォーラムから月例研修会（県土づくりコンサルタンツ協会主催）への講師の派遣です。

今回は、研修委員会の活動の中から「月例研修会への講師派遣」について、私の体験を通じてご紹介したいと思います。

2. 月例実務研修会

私は、(社)佐賀県県土づくりコンサルタンツ協会の「研修分科会長」でもあります（主催者側）ので、フォーラムと協会の二つの立場で「月例実務研修会」について述べさせていただきます（少し複雑な立場ですが・・・）。

協会主催による月例実務研修会は、平成13年から現在まで10年間継続して実施されています。その目的は、協会員のコンサルタントとしてのスキルアップです。私がこの月例実務研修会に携わったのは、平成16年からで、はやいもので7年が経過しました。

この研修会にかかわりはじめた頃から、若手技術者の育成のための研修に力を入れだし、初級者向けコースを中心に行われてきました。研修は3回をワンクールとして実施し、最終回は、“百聞は一見にしかず”の諺どおりに、クールのテーマにちなんだ「現場見学・実習」を盛り込みました。現場見学の手配

は、スムーズに行くことがまれで、いつも綱渡りの状態で段取りをとっていたように記憶しています。講師の手配も、土壇場になってキャンセルなど（いわゆるドタキャン）、スムーズに行った試しがありませんでした。このような苦勞の甲斐あってか月例実務研修会は、毎回15～20名の参加があり、若手の技術者からは上々の評判を得ることが出来たと自負しています。

平成20年度からは、今までのように聞くことを主体とした研修から、活発な意見交換ができるような形態に変更した若手技術者による事例発表と中級・上級技術者（幹部技術者）を対象としたシンクタンク研修の二本立てとしました。まず、若手技術者による事例発表は、参加者の前で経験した設計実務の事例を発表することにより、プレゼンテーション能力を向上させることを狙いとしました。次に、シンクタンク研修は、高度な技術を習得することによりさらなるコンサルタントスキルの向上を図ることを狙いとしました。さらに、昨今の継続教育（CPD）等が各種資格（RCCMなど）の更新条件となってきたことから、シンクタンク研修は、建設系CPD協議会でCPDの相互承認を行っている「日本技術士会認定プログラム」の登録を得ております。事例発表会は、「日本測量協会」の測量CPD及び「全国土木施工管理技士連合会」のCPDSの認定を受けたところでした。



月例実務研修会風景

3. おわりに

今後は、さらなる研修内容の充実を図ると共に、いままでの研修会を将来に繋げることが重要だと考えています。

さらに、研修委員会で「月例実務研修会」のありかたなどを大いに議論し、コンサルマンとしてのスキルアップと人づくりに貢献できればと、思い描いているところです。

経営者の立場における 技術士活動について

内山 雅仁

(建設、総合技術監理・宮崎)



1、はじめに

“経営”という側面をみると、総合監理技術を駆使することが業務の大半の時間を占める感がある。しかしながら、中小企業経営者の場合、現場の技術的課題に自ら向き合う局面が少なからずある。中小建設事業の経営者の立場において、建設技術士及び総合監理技術士としての活動について想うところや具体的な取組みについて述べてみたい。

2、建設技術士として

(1) 当事者として

現場を進める上で、4M（人、機械、材料、方法）を有効に使い、効率的に品質管理を行うのが現場代理人である。大手ゼネコンなどは人材が豊富であり、会社経営者が日々の現場管理に関与することは少ない。

一方、特に宮崎のような地方の中小企業は人材確保が容易でなく、十分な技術力を有していない技術者を現場に配置せざるを得ないことがある。加えて、技術者数も十数名と組織階層が少ないため、例えば複数の現場を同時に受注した場合や中間管理職が複数の業務を兼務している場合などは、現場技術者の直属の上司が経営者である、という事態が発生する。そうすると、現場で課題が発生すると、経営者自らが現場に足を運び、現場代理人と一緒に問題解決を図る当事者になる。おかげさまで、経営者という立場になっても、現場と向き合って技術力の研鑽を図る機会に恵まれている。

(2) 指導者として

経験豊富な技術者であっても、想定外の現場変状に直面した場合、過去の経験則の枠から飛び出せず、現場で立ち往生するケースもある。そこで、現場変状の構造的な原因を調査・分析し、論理的思考に基づいて効果的な対策をとる、という行動パターンを身につけさせることが、建設技術士としての役割となる。

幸い、経営者の立場になると人的交流の機会が格段に広まり、技術士などの高度な技術を有する方々との技術的交流の機会も比例して拡大するため、自分の技術力の枠を超えた問題に遭遇した場合でも、有益なアドバイスを得ながら問題解決を図る手法を、自らの行動をもって社員に指導することができる。

3、総合監理技術士として

(1) 顧客満足度の向上

①品質管理

「顧客からのクレームを如何に減らすか」という

ことは、顧客満足度の向上において不可欠な要素である。会社で特に力を入れて取り組んでいるのが、ISO管理項目にある「是正措置・予防措置」である。「失敗はしていい。しかし、同じ失敗は発生させない」という姿勢のもと、社内で発生した失敗事例はその原因を分析し、その素因となっている行動パターンを事前に予防する仕組みを考えてもらっている。そして、その情報を会議などで全社員に共有してもらおう取組みを行っている。

②人的資源管理

社員が造る建造物の先に、それを利用する顧客が存在する。つまり、社員の質の向上無くしては、顧客が満足できる建造物の質の向上はありえない。当社では、手作りの人事考課制度を構築し、年2回の人事考課とそれに連動する形で年1回の賃金査定を行っている。査定方法に関する情報はオープンにすることで、透明性を高めている。

③社会性管理

現代社会において、企業は環境負荷の低減に向けた活動は避けて通れない。継続的な取組みを経営に組み入れるために、環境ISO14001の取得を1999年に行った。

(2) リスク管理

①労働災害発生リスク管理

今から6年前。創業49年目にして初めて労災死亡事故を発生させてしまった。今でもそのときの惨状は鮮明に思い出せるが、以来極力自らが現場に足を運んで、安全衛生管理上の注意を喚起するように努めている。また、年一回の安全大会では、死亡事故発生現場に社員全員が赴き、黙祷を捧げることで、当時の教訓を陳腐化させないようにしている。昨年は、安全管理もその他の管理（品質、環境）と一元化すべく、OHSAS18001の取得を行い、より効果的な安全衛生管理に努めている。

②会社経営破たんリスク管理

経営者は事業を継続させなければならない。そのためには、経済性管理を徹底することが重要である。日々の原価管理はもちろんのこと、利益管理に加えて、資金管理（資金繰り）を定期的に行うようにしている。また、決算時においては、利益面だけでなくキャッシュフローの側面からの検証も行い、財務内容の健全化を図っている。

品質に関する事故発生は、上記の労働災害発生と合わせて経営を揺るがす大きなリスクとなりうる。十分な対策が必要であることを肝に銘じて取り組んでいる。

4、おわりに

技術士の社会的使命は、技術をもって社会貢献をする、ということである。一方、企業の社会的使命は、企業経営をもって社会貢献をする、ということである。

技術士の経営者である以上、技術力向上を図ることで企業経営を発展させ、その先になる地域社会の発展に貢献できるようにこれからも日々精進していきたい。

受け身の姿勢では仕事はとれない

宮田 守次
(金属・北九州)



1. はじめに

1977年に技術士登録をし、10年間の企業内技術士を経て、1987年に有限会社宮田技術士事務所を設立、独立・開業し、その後名称を有限会社ミヤタハイメックに改称、更に現在に至っている。

今年で技術士登録後33年、開業後23年になる。

開業後は、開業技術士として、金属加工分野である「鑄造、鍛造、熱処理技術」と「品質管理指導」の技術コンサルタント業務に専念してきた。

国内企業団体は200社以上、海外7カ国延べ14回、海外調査も24カ国に及んでいる。

最近経済産業省のサポイン事業（戦略的基盤技術高度化支援事業）に関係して、自動車産業分野の案件をH21年度4件、H22年度2件の採択により、関東経済産業局扱いの中小企業鍛造技術開発に参画している。

2. 今後の自動車産業関連鍛造技術の動向

自動車産業界では、ハイブリット化、電気自動車化、水素燃料電池自動車化による差別化、環境対応化、コスト低減化など国際的な競争力強化に各社しのぎをけずっている。

従来型のガソリンエンジン方式の自動車はいずれ市場から消えていくであろう。たとえば代表的鍛造品であるクランク軸は最終的には市場から消えていくであろうことは容易に推測できる。

そこで今後いかなる自動車になっても、市場に残る鍛造品を考えると、トータルコスト低減のためには、機械切削不要の金型鍛造の量産部品として考えられるものの2～3の事例が

- 1) トランスミッションの複合型精密冷間鍛造製ヘリカル歯車類
- 2) 精密冷間鍛造製ベアリングレース類
- 3) 超高温耐熱性のエンジン用特殊バルブ類
- 4) 複合化された軸類

などがある。自動車組み立て企業では、機械切削工程における切削費用がコストと納期競争上のネックポイントであるから、複合型精密冷間鍛造による機械切削省略は重要な課題である。

幸い日本が世界に先駆けて開発してきた以下に示すような鍛造技術など

- 1) 複合鍛造、2) 分流鍛造、3) 背圧鍛造、4) 密閉鍛造

の組合せ併用による超精密鍛造技術の推進方法と、同時に日本で開発されたサーボプレスの併用により、世界が注目する鍛造業界の技術革新が進んでいる。

3. 技術士としての関与

平成22年度に採択され、私が提案し、推進している案件のプロジェクトの一つに、九州大学で開発したナノサイズ超微細結晶粒化技術を応用し、自動車のエンジンバルブや航空機タービン用の超合金部品の量産型精密鍛造技術開発がある。

プロジェクト推進を管理している管理法人である鍛造技術開発協同組合は会員が中小鍛造企業で、その他私のような小規模事業者約10社で構成している。経済産業省、特に関東経済産業局に新しい鍛造技術開発の工業化について提案し、中小鍛造企業の収益向上につながる実用化可能な新鍛造技術を探索し、提案して、その鍛造技術開発案件の受託資金を得て鍛造技術開発活動を行っている。

私は鍛造技術アドバイス面と文献調査など技術調査活動、更に大学等の技術導入・応用や具体化の情報提供などのコーディネートをし、サポートしている。

会員の年会費が36万円と高額であるが、それなりの仕事を受注している。

4. おわりに

受け身の姿勢では仕事はとれない。技術も出し、汗も出し、金も出し、人も出し、口も出しても、成功させ、将来の発展をさせようとする会員経営者集団であればできる発展性がある。

私は自分の専門分野を生かし、高額の会費を支払っても、それなりに報酬（受注）を得て、継続的に業務遂行ができることはありがたいことである。

関東地方の企業が中心であるが、鍛造技術開発と業界の技術革新に貢献できれば望外の喜びであると考えている。

技術者としての新たなスタート



小島 くみ
(環境・鹿児島)

私は、環境計量を行う技術者として就職し、それから20年余り、環境の計量に関する業務に携わっております。

当初、私は技術士とは何か、ほとんど知識を持っていませんでした。私が就職した当時は、公共投資もそれなりに存在し、業務を遂行するにあたっても資格保持が必須条件とはなっておらず、ほとんどの業務は、知識と経験で為されていました。それ故、知識豊かで経験豊富な諸先輩はたくさんおられました。技術士として活動している方は身近には存在しませんでした。そんな私が、技術士を身近なものとして認識したのは10年ほど前で、尊敬する上司が技術士として活動を開始した時です。それまでは漠然と、「よき技術者になりたい。」という思いはありましたが、自分が思い描く「よき技術者」なるものがどのようなものなのか、確固たるビジョンがあったわけではありませんでした。けれど、上司の技術士としての活動開始を機に、技術士の存在価値や倫理観等を知り、漠然と感じていた「よき技術者」の姿がそこに描かれていると強く感じました。「業務上必要な知識や技術を学び、倫理観を高めるよう努め、そして、技術士となる。」ことが、自分が思い描く「よき技術者」に近づくことへの第1歩ではないだろうか考えるようになりました。その後、なんとか環境部門の登録を受け、技術者としての新たなスタートを切ることができました。

近年、地球温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨等々地球環境が危機的状況にあるといわれています。地球温暖化の影響といわれる異常気象によって、一方では干ばつが、他方では洪水が頻発し、その結果、地球規模での水不足あるいは大水害が発生しています。また、経済活動の活発化に伴う大量生産、大量消費による資源の枯渇や大量廃棄による廃棄物の増加、有害な化学物質の拡散による生態系の危機等も発生しています。これらの事象のほぼ全てが、刻々と深刻さを増し、生活基盤を脅かすなど人類の存亡にも関わってきています。現在は、環境問題を無視して

は人間社会が成り立たない状況にあると言えます。

環境計量は、大気環境、水環境、土壌環境など個々の状況を数値化することを目的とした業務で、多岐にわたる環境に関わる分野のなかの一翼を担っています。環境計量による数値化によって、大気や水、土壌の状況の把握が可能となります。その結果、良好な状況であるという判断が得られれば、その後の保全に関する対策を、また、汚染が疑われる状況であるという判断が得られれば、汚染源の特定あるいは汚染低減などその後の対策を模索することとなります。昨今の環境問題への関心の高まりに伴い、これまで以上に、個々の状況を正確に数値化し、これら数値の持っている意味を十分に理解することが重要となってきました。私たち環境計量に携わる技術者の役割は、このニーズに答え、様々な状況を迅速かつ正確に数値化し、発注担当者やその他の方々に、その数値の持つ意味をわかりやすく説明することで、状況を十分に納得してもらい、その後の展望を開いてもらうお手伝いをすることであろうと思っています。

ところで、技術士として仕事を始めたばかりですが、鹿児島という土地柄もあるのでしょうか。女性の技術士は物珍しいのか、初めてお会いする発注担当者の方々にも、これまで以上に話を聞いてもらえるようになりました。けれどこれは、物珍しさからばかりではなく、技術士が社会的に信頼されているからに他ならないと思っています。今後は、このような技術士の社会的信頼を裏切らないように、さらに学び続けることが必要だと思っています。これからは専門分野だけに止まらず、CPD研鑽会に参加させて頂くなど、幅広い技術や知識の習得に努めるとともに、視野を広げ、倫理観を高めるなど、人としての資質の向上を図るよう、一步一步前進していきたいと思っています。そして、社会の構成員のひとりとして、何らかの形で社会に貢献をすることができるような技術者になりたいと思っています。

私の技術士業務

柴田 秀夫

(機械、経営工学・北九州)

1) はじめに

昭和53年に技術士登録をし、技術士会に入会して32年になる。現在82歳で有るが、技術開発業務で企業の支援を行っている。平成8年には九州支部の御推薦によりお陰様で日本技術士会会長賞を頂いた。しかしながらこの32年のうち、独立技術士として活動してきた22年間の実施技術の変遷はめまぐるしい物が有り、その大半は技術士資格取得時の専門技術（大型造船用クレンの設計・工場計画）とかけ離れた広範囲の技術分野のテーマで有った。平成元年頃より国による中小企業の研究開発支援政策が強化され、これを通じて遭遇した技術上の問題点は様々な内容の物であり、その中で自分の出来る部分を模索し設備開発に結びつけ、他の専門家、又は専門メーカーとの連携でこれらを乗り越えて来た。この間関わった業務の技術分野は、“特殊焼却炉開発”、“マイクロ波による乾燥”、“活性炭製造技術”、“廃油燃焼技術”、現在進行中の物は“ドライクリーニングに代わる洗濯システム”開発に及んでいる。

2) 独立技術士としての活動と基本的理念

昭和53年技術士機械部門登録昭和58年経営工学工場計画)部門登録 企業内技術士として10年間設備開発に従事した。企業勤務時業務は国内製鉄業・大手造船業の大型設備の設計・設備開発・工場計画・建設に従事した。企業退職後現在迄22年間技術士事務所開設した。独立後最初の技術士としての業務は福岡県技術アドバイザーとして県内某中堅自動車部品製造企業に派遣され、新消防設備開発を行った。その後約22年間この業務がきっかけとなり、企業顧問・役員その他北九州国際技術強力協会講師・コースリーダー(コース管理者)として技術士業務を行っ

て来た。

この22年間の独立技術士業務の経験で、業務獲得で重要な要素になったのは福岡県工業技術センターの存在で有った。企業を退職した技術士には、研究設備・スタッフ・資金等ゼロからのスタートで有る。更に技術に関する仕事の流れは県内外中小企業より工業技術センター（各専門研究員）に更に各専門研究員の担当外・専門外業務については、外部技術専門家に組みの照会が来る。私は技術士になって32年であると同時に22年間県関連の技術アドバイザーであった。この間技術士会本部より受託した業務は1件（若松アンローダー主桁破損事故技術評価）のみであり、県技術アドバイザー関連で担当した企業支援技術開発プロジェクトは十数件（公的研究開発助成2億数千万円）で有り、22年間充実した技術活動を経験できた。

上記経験より得た技術活動の基本的理念。

1) 技術を通じた人間関係の構築

私はバガス活性炭開発を通じて沖縄との関係が始まり、現在まで約十年間その関係は継続している。

2) 直面した技術テーマに専門外の問題で有っても、出来る事を模索・挑戦する。

自分が企業内で行った技術のみでは、技術士の仕事は成り立たない。

3) 技術士会への提言

現在中央政界では地方分権が叫ばれているが、技術士会も小さい本部と、地方支部への権限委譲を行い、会員増強と会費の低廉化を実施すべきである。技術士会発展のバロメーターは会員数で有る。

修習技術者の声

資格取得に対する 想いについて

高城 嘉樹
(農業・宮崎)



私は、平成20年度に農林水産省に入省し、現在、九州農政局 南部九州土地改良調査管理事務所に勤務しています。技術士一次試験は入省年度の平成20年に合格して、今年で修習技術者として2年目を迎えました。

私が初めて「技術士」という言葉を知ったのは、業務発注に関する各種資料の中で「技術士」という文言が多く使われていたこと、また、コンサルタントの方とお会いして頂く名刺には、必ず「技術士」と明記してあることからでした。そもそも民間会社は、国や地方自治体が発注する調査・測量・設計等の業務を受注するために「技術士」という資格が必要となっているのに、発注する側の私たち職員は資格が必要なのか。入省して2～3ヶ月間、このことを自問自答していたことを今でも覚えています。そし

て、発注者側の私たちは、契約締結後に民間の技術士の監督職員となり、成果品の検査まで行わなければなりません。私は、民間会社と同じ資格を有し、技術者として対等な立場で国民の利益につながる、よりよい仕事がしたいと考えて本資格の受験を決意しました。

受験勉強では日常の業務を深く掘り下げ、自分なりに考えることを心掛けています。勉強材料は日々の仕事の中に埋もれていて、前例を模倣して何も考えずに目の前の仕事を処理しては、それが材料であることさえも気づかないでしょう。本資格の受験を決意してから、仕事に対する取り組み姿勢が前向きとなり、資格取得の目標が、仕事に対するモチベーションの向上につながっていると感じています。また、民間会社の技術士と一緒にお仕事させていただく中で、技術力の素晴らしさを目の当たりにすることがあり、民間会社の技術も立派な勉強材料だと思っています。

現在は修習技術者として、技術士になるための修行期間中であることから、休日には、セミナーに参加する等、知識の習得を心掛けています。早く資格を取得して、一人前の信頼される技術者になるために、今後も日々精進していきたいと思えます。

修習技術者としての 心構え

古江 雅和
(建設・長崎)



私は、平成18年度に現在勤務する建設コンサルタント会社に入社し、修習技術者(技術士補)になったのは平成20年度である。大学時代の友人達からすると遅めの合格であった。

大学では、土木系学部で、主に河川工学(水文学)の分野を専攻していた。現在は主に地すべりや急傾斜などの地質調査・設計業務に従事している。大学で専攻していた内容と就いた職業の仕事内容が違うということは、私に限らずほとんどの人に当てはまることなのであろうが、私の場合は次のような感じである。

大学時代は「閉鎖性水域に流域内の汚濁物質が流入しないよう、流域内の浸透領域を増やそう」といったテーマの研究に携わっていた。

現在は、「地すべり活動を抑制するために地下水位を低下させるよう、山から水を抜こう」という設計を行っている。

もちろん地理的・地質的特性や内包している問題点は現場ごとによって異なるが、“表流水を浸透させる”から“地下水を地中から排除する”と、言葉だけ聞くと全く逆のことをしているように感じる。土木分野の諸問題に対する解決のアプローチは面白いものだなと思える。

現在入社5年目の“ヒョッコ”だが、自分なりに様々なことを経験し、土木の分野は視点が変わることによって解決へのアプローチが全く異なることを、身をもって知った。1つの分野を掘り下げて深い知識を得ることも大切なことだが、他分野を知ることにより広い見識を持つこともコンサルティング業務に携わる者にとって重要なことだと思うようになった。

特に昨今の土木業界の変遷は目まぐるしく、総合的、多角的視野を持った技術者である事が生き残っていく鍵になるのではないかと感じる。

修習技術者とは“常に学ぶ姿勢を持った技術者”であると私は思う。これからも様々な業務、研修に積極的に参加し、自己研鑽に努めていきたい。

技術情報

「建設コンサルタント 業務・研究発表会」 受賞に当たり

鐘 廣喜

(総合技術監理、建設、上下水道・大分)



1. 「建設コンサルタント業務・研究発表会」の概要

「建設コンサルタント業務・研究発表会」は(社)建設コンサルタント協会(JCCA)並びにインフラストラクチャー研究会(JCCAに所属する研究機関)により毎年開催され、建設コンサルタント業界では最大規模となる業務・研究発表会である。賞の授与は、まず全国からの応募論文(今年は59編)を審査の上24人の発表者を選出する。発表は東京(グランドアーク半蔵門)で、2つの会場(道路・交通部門と河川・都市部門)に分けて行われる。大学の先生や協会役員及び大手コンサルタント会社の役員等で構成される計12人の審査員による審査が行なわれ、最優秀賞1名、優秀賞1名、特別賞5名の受賞者が選ばれた。私が授与されたのは「特別賞」(着想部門)であった。賞品は「表彰状」、「楯」、「副賞」であった。ちなみに最優秀賞の副賞は50万円の海外視察費の全額補助で、優秀賞はその半額であった。

2. 投稿－発表－受賞までの経緯

私が発表した論文は本誌7月号の「技術情報」欄にも紹介させていただいた『「1サイズ載荷板法の問題点」及び「2サイズ載荷板法」の提案』であった。一昨年から2年連続投稿した(「研究概要」)が、何れも落選。今年の当選は正に“3度目の正直”のようなものであった。また九州地区からの選出は今回始めてであった。

この論文は大分県技術士会CPD研修会や土木学会全国大会研究発表会、土木学会西部支部技術発表会、日本技術士会技術士業績・研究発表年次大会、北九州技術士会研修会等で発表してきた。論文は長年定着されてきた“常識”とも言えるやり方に対する否定的な見解で、基準書にも影響を与えかねない内容だけに、肯定的意見や高い評価と暖かい応援をいただいた反面、懐疑的または反対意見ないし反発も

少なくはなかった。そこで賞を設けられた今回の発表は、発表させてもらえるだけで十分と自分に言い聞かせる半面、どこか「なんでもいいから、賞がほしい」という切実な願いも確かにあった。

今回の掲載用論文の書き方は文字の大きさから、フォントや行間隔、空白スペースまですべて細かく決められており(「論文作成要領」だけで3ページ)、論文の書き方に不慣れな私が論文作成にひとまず苦勞し、期限ぎりぎり論文を提出した。

さすがに賞を意識したのか、またいままで怠ってきた「コンクリート診断士」試験も発表前日に控えており、発表前はかなり緊張した日々であった。

3. 感想

- (1) 今回の「特別賞」は特に大きな賞ではないが、少なくとも論文の正確性は受賞という形で正式に認められた点においては重要な意味を持つと考える。また、今後の地盤支持力照査方法には大きな影響を及ぼすことになるだろうと考える。
- (2) 研究を主体業務としない建設コンサルタント会社として、さらに地方の小規模コンサルタントとしての今回の受賞は、会社(日進コンサルタント株式会社)や役所の理解及び強力な支持がなければできなかったため、会社及び役所の担当者の方々に深く感謝したい。
- (3) これまで多くの発表で多くの専門技術者からいろいろな意見(反対意見や批判も含めて)やアドバイスを受けてきたからこそ、改善と修正を重ね、論文の説得性を高めることができたと考える。従って発表の場を提供していただいた主催者や関心を持っていただいた技術者たちに感謝したい。
- (4) 一つの考えを他人に認めてもらえるかどうかは、考え自体が正しいことは前提ではあるが、どれだけ説得性があるかはもっとも重要なポイントになると痛感した。(今回の受賞もプレゼンのお陰といっても過言ではない)。従ってわかりやすいPPTの作成及び発表、質問に対する適切な答えが非常に大事と考える。
- (5) 今回の貴重な経験を生かし今後も続けて研究していきたいと考える。

新米農民奮闘記



大坪 弘幸

(森林、建設・鹿児島)

私の父は、農家の出であるが、学校卒業以来、勤め人をやっていて、私は、勤め人の子として育ってきた。

父は、勤めを定年退職すると第2の職場の傍ら父祖伝来の田畑を耕し始めた。はじめは、若かったせいもあって、稲作をはじめ、サツマイモや野菜などかなりの面積を耕作していたが、次第に面積を減らし、近年は田1枚と畑を一畝ほどに減らしていた。しかし、高齢のためそれもできなくなり、後は、私がやることとなった。

もちろん、私もこれまでに、父の手伝いをさんざんやらされていたので、農業のことは、多少は自信があり、全くの初心者ではない。

一昨年の秋から全面的に引き継ぎ、2年目の秋を迎えているが、全てを自分でやるとなるととまどうことも多い。

折角、自家用の食材を生産するのだから、可能な限り、有機堆肥を使用し、少農薬でいきたい。また、現在、私も職を持っているので省力農業でいきたい。

先ず、堆肥づくりである。

昨年までは、父のストックしていた堆肥があったのでそれを使用していたが、それが底をつく前に、作ることにした。さすがに人糞は、使用したくないので、近くの畜産農家から牛糞堆肥を購入し、雑草や稲藁を原料として作ることにした。

稲藁は稲作をやっているので十分にあるのだが、刈取りを全てコンバインにすると藁が採れないため、一部を架け干しにして対応することになっている。

ところが、昨年作った堆肥は、藁を長いまま堆肥化したので散布するとき扱いにくいこと甚だしい。確か、藁を切断する大きな刃の藁切りがあったはずだが、と、厩の2階を探すとまだ立派に使用できる物があったのでそれを使用することとした。今年の秋には、良い堆肥ができるはずだ。

現在の耕作面積は、田が12アールと畑が3アール程度である。農業に費やすことのできる時間は、週2日の休日のうち1日程度であり、しかも田畑は自

宅から35キロほど離れた場所にあるため、実際に働く時間は、カミさんと二人で週4時間程度である。省力農業でいかざるを得ない。そのためには、農業機械が不可欠である。

幸いにして、父がトラクター、動力噴霧器などの農業機械をもっていたので、それを使用しているが、何しろ旧式の古い機械ばかりで、しかも手入れ不足のため、思うように動かず、だまし、だまし使用している状況である。田植機などは、歩行式の2条植えて、しかも購入時に、既に、15年ほど使用した代物である。それでも、無いよりはましで、大いに役立っている。まあ、年2時間ほどしか使用しないのだからこれで良いか。

昨年の畑作は、気候が新米農民の味方をしたのが、茄子、トマト、里芋など大豊作であった。気をよくして、今年は面積を増やし、近所、親戚までお裾分けをしようと張り切ったが、そうは問屋がおろさない。長梅雨のせいで、茄子、トマトなど全てが不作であった。放っておいても収穫できるニガウリさえも収穫できない有様であった。正に農業は、お天道様任せで、古来盛んに豊作の祈願が行われたのが理解できるというものだ。

一方、稲作で感心させられるのが、稲の強さである。田植えて、苗が少々浮いていようが、曲がっていようが、一月後には、新米農民の田んぼも、隣のベテラン農家の水田と遜色のない立派な稲がそろって見事なものである。宝といわれていた米は、実は、雑草より強い草から採れるのだ。コブノメイガに葉が少々やられても見事な黄金が実の付くのはもうすぐだ。

既に、私は、技師として役所勤めを終え、第2の職に就いているが、これとていつまで続くのか見当はつかない。

ただ一つ言えることは、農業が、私の終(つい)の職業であるということだけは、確からしいということだ。

賛助会員の声

日本地研株式会社
永嶋 洋政
(建設、総合技術監理・福岡)



弊社は本社を福岡市に置き、昭和30年の創業以来55年にわたり測量・地質調査・建設コンサルタント業務をはじめ、斜面防災対策工や地すべり対策工などの各種専門工事にも幅広く事業展開を行っております。営業範囲は主に九州各県と山口県を中心とした地域で、官庁発注の公共事業を通じて、地域に密着した専門技術のサービスを行っております。

企業内技術士の数は10数名ですが、昨年度は一度に3名が合格したため、後進のモチベーションも高まっています。部門別の内訳は総合技術監理部門2名、建設部門9名、応用理学部門4名となって

おり、各分野で委託業務の品質向上、業務表彰等に貢献しております。

これまで国土交通省や自治体をはじめとした官庁の受注が多かったのですが、建設投資の減少と共に昨今の公共事業抑制のあおりを受け、我社も苦戦を強いられています。このような状況の中、最近では特に維持管理分野、防災分野の方に業務がシフトしており、弊社では特にのり面既設アンカーのリフトオフ試験、空中写真撮影、軟弱地盤の三成分コーン試験などを積極的に提案し、発注者のニーズに応える努力をしております。

社内では急速に技術社員の高齢化も進んでおり、業務内容や業務体制などの環境が変化する中で、若手技術者への技術継承に力を入れているところです。

若手技術者の養成には社内教育だけでは限界があるため、今後とも、日本技術士会のご支援をお願い致したいと思っております。

新栄地研株式会社
代表取締役社長 **真弓 幸慈**
(佐賀)



日頃より皆様方にはお世話になっております。新栄地研は「地域社会に安心と安全を、お客様に信頼と満足を」を会社の基本理念としております。私たちが行う仕事は建設業の中でもサービス業に分類されるものです。当社は仕事をする上でお客様が満足されることが一番と考えておりますことから、確かな技術力とおお客様の立場を考えたよりきめ細かなサービスを提供することで地域社会に貢献していきたいと思っております。当社は昭和59年6月に土質試験を母体として設立いたしました。その後会社の発展とともに、地質調査、測量、補償、設計と業務品目を広げてまいりました。最近では環境への関心がより高まっておりますが、当社も以前より環境分野に興味がありましたことから、6年ほど前から水質

試験、土壌汚染分析調査を始めております。現在では騒音振動、生物調査を業種に加えておりまして、地域社会に貢献できるよう地域に根ざした総合コンサルタントの土台が出来つつあるところです。また当社は8年ほど前よりISO取得に努めておりまして、平成14年に品質に関する9001、平成17年には環境に関する14001を認証取得しております。地域に根ざした総合コンサルタントになるには当然技術の向上は欠かせません。現在当社には4名の技術士と5名の技術士補がおり、日常の業務をこなしております。また技術士を一人でも多く増やせるよう資格取得を奨励し全面的にバックアップしております。会社として企業内技術士に望むことは、技術のレベルアップは当然ですが、専門分野の他に幅広い知識を基としたバランス力を身に付け、明確な目標と目的意識を持ち、人格を磨き、企業を助け地域社会に貢献することです。

最後に建設業界は公共事業の減少、景気の低迷といったよりいっそう厳しい状況での経営をしいられることと思います。技術士会の皆様にはよりいっそうのご活躍と技術的ご指導をお願いいたします。

夢を持てる会社を目指して

環境テクノス株式会社 **岩本 浩**
(建設、総合技術監理・北九州)

環境テクノスは、「地球の明日を考える」をスローガンとする「環境総合コンサルタント」です。昭和48年、激甚な公害に苦しむ北九州市にあって、大手化学メーカーに勤めていた現社長が「環境を汚染する側から、環境を保全する側へ」との思いで会社を退職、公害研究所を創業したのが始まりです。昭和51年に(株)北九州公害技術センターへと商号変更するとともに法人化、本格的に公害測定・分析を中心とした業務を開始しました。その後、局地的な産業公害問題は収束し、自然環境や地球環境など広域的な環境問題がクローズアップされるようになったことで昭和62年、現在の環境テクノス(株)に商号変更、国内外の多様な環境ニーズに対応しながら現在に至っています。

環境計量士を資格の頂点としてきた我が社が、技

術士という資格の存在を知ったのは平成4年、建設部門の専門科目に「建設環境」が追加された時でした。当時3部門を取得されていた竹内氏(現北九州地区広報委員)をお招きして、技術士に関するレクチャーを受けたことを思い出します。あれから18年、現在、私を含め技術士は3名ですが、これからの会社を担う30代を中心に、10名以上の修習技術者が技術士を目指しています。

リーマンショック以来の不況が続く中、我が社もここ数年は厳しい状況が続いています。変化が激しく、過去の延長線上に将来はない、という状況の中で、目先ではなく、中・長期的な視点で会社の方向性を見直す必要があるとの判断から、「ビジョン策定委員会(委員12名)」を立ち上げました。この委員会のメンバーは、将来を嘱望される30代が中心で、その内、委員長を含む6名が修習技術者です。経営層は、あくまでもオブザーバーです。これからの会社の将来は、これからの担う次世代が考える、当然といえば当然の話です。夢を持てる会社を目指して、どのような提案が飛び出すのか・・・楽しみにしています。

お知らせ

「第30回地域産官学と技術士との合同セミナー」の案内

事業・CPD委員長 **長野 義次**
(農業、総合技術監理・北九州)



このたび、(社)日本技術士会では九州支部の担当で、標記セミナーを下記要領により開催いたします。今回の合同セミナーは、九州支部平成22年度第3回CPDをも兼ねるもので、テーマは「地域に根ざした技術士の社会貢献」として、極めて興味深い内容となっています。

——— 記 ———

1. **講習会名** 九州支部平成22年度第3回CPD
(技術士CPD課題区分 A- ほか)
2. **開催日時** 平成22年10月23日(土)
10:00~17:00(9:30受付開始)
3. **開催場所** 福岡商工会議所ビル301, 302号

4. 講演及び内容(技術士にはCPD認定6単位)

- 挨拶 (社)日本技術士会 会長 高橋 修
九州支部長 甲斐 忠義
- 記念講演
西日本新聞社 代表取締役社長 川崎 隆生氏
【演題：地方メディアの課題と展望】
(世界的な高度情報化社会の進展の中、iPad誕生等の情報機器の革命的普及も含め、地方から世界が見えるメディア革命最前線について)
- 基調講演
九州工業大学副学長 産学連携センター長 鹿毛 浩之氏
【演題：産官学連携と技術士活用への考察】
(九州工業大学における産官学研究に取組みの実情と課題についての解説。)
- 技術講演
(株)テムザック 代表取締役社長 高本 陽一氏
【演題：ロボットの開発の実践と今後の展開】
(災害支援・留守番・介護ロボット等の開発経営に

関する国際的反響と今後の展開。)

- パネルディスカッションは コーディネーター 小出 剛・副支部長の案内で、当日の記念講演、基調講演、技術後援の内容を参考とした、各パネリストからの現状と問題点を簡単に会場に対して投げ掛けて頂き、壇上と開場が質疑応答・意見披露など全員での意見交換を主体に進行し、結論が導かれる予定です。

パネリストには 沼尻健次、泉館昭雄、田中孝一、冷川久敏、石田寛生の5 技術士を向かえ、技術士が地域産官学との調和を基に社会貢献していくための基本的方向付けを議論し、次に九州地域自治体等業務支援技術士センターについて、具体的にそれぞれの立場から防災・維持管理調査検討、工事監査の技術調査、工事設計・積算・監理・環

境対策、エネルギー活用、JABEE、理科支援、地域特産品ものづくり、農商工連携支援などの事例提案等も含め、討論します。

5. 参加費(資料代): 1人3,000円(当日徴収。なお、昼食・飲料等は各自負担でお願いします。)

6. 参加申込先:(社)日本技術士会 九州支部

TEL: 092-432-4441 FAX: 092-432-4443

参加ご希望の方は、下記のいずれかの方法にてお申し込み下さい。申込期限10月21日

①「CPD申込フォーム」

<http://www.formzu.net/fgen.ex?ID=P22688197>

②支部ホームページ「CPD案内」から、

<http://www.pekyushu.com/>

③九州支部宛FAXにて送信

本部近況

理事会報告

(社)日本技術士会・理事
松原 好直
(上下水道・北九州)



平成22年度第2回理事会は7月15日に開催されました。今回は、事前に配布された【I】第1回理事会議事録の確認、【II】審議事項:2件(資料1~2)、【III】報告事項:18件(資料3~20)、【IV】その他があり、その資料等は九州支部にて閲覧可能です。

また、理事会に先立ち、理事としての使命、支部の課題(地方の声)等を中央に届け、さらに、同じ意見を持つ地方理事による勉強会を始めましたことは既報のとおりです。

その中で特筆されるのは、“地域組織に関する検討”についてです。現在の地域組織は、現行の支部以外に、都府県や北海道における地区などの地域的な単位で設置する本会内部の組織のことを指すもので、現時点での設置はありません。そのため次の検討を実行中です。

順序として、①関東甲信地域における(社)日本技術士会の地域組織を設置する。①を実施後、②関東甲信地域を除く(社)日本技術士会の地域~地方組織

を設置するものです。

地方組織の名称は、今後、任命等を含めて決定されるものの有力な案として、九州支部は

- 支部:(社)日本技術士会 ○○支部長
→ (社)日本技術士会 ○○本部長
- 県単位:

(社)日本技術士会 九州支部 ◇◇県代表幹事
→ (社)日本技術士会 九州本部 ◇◇県支部長

なお、会員により細かなサービスを行ううえで道府県に複数の支部があっても可とし、その場合は、(社)日本技術士会 九州本部 ◇◇地区支部長を名乗ることになる。

以上から、その必然性は省略しますが、これにより△△地域技術士会や紛らわしい名称を使用した類似の会との差別化が可能となります。

次回の理事会の課題等については、既にメールで流され支部長と理事とで調整中です。

(おことわり) 理事会の議事録は月刊誌“技術士”=PE (IPEJ Journal) =に詳細に記載されています。また、本部のホームページにも早い時期に公開されていますのでご参照ください。現在は、議事録の記載事項は省略し、支部に直結した大事なところのみを抜粋して支部に報告しています。なお、各県地区等で説明が必要な場合は声を掛けてください。

平成22年度第2回 支部長会議報告

九州支部長 **甲斐 忠義**
(建設・福岡)



去る9月2日、標記支部長会議が開催されましたので、本部事務局報告のうちから主要な議題を報告します。

今回の議事のうち事務局報告については、葺手第2ビル5階会議室と支部事務局を結んだWEB会議を試験的に実施しました。WEBシステムは正常に機能しました。今後本部各委員会と支部委員会の間で活用されます。

主要議題

1. 「支部長部会長、常設委員会及び実行委員会委員の定年制について」請願のあった件について理事会で検討の結果、反対の意見が多く実施しないことに決定した。

2. 司法支援活動について

科学技術的な問題を含んだ民事事件に裁判所から技術士会に、鑑定人、専門委員、調停委員の推薦要望が来ている。本部社会貢献委員会・司法支援検討小委員会できとまとめ作業をしており、11月を目途に支部で希望者をまとめるよう指示があった。

3. 地域組織の検討状況について

新公益法人移行の時期が近いうちに行われる情勢の中、総務委員会での検討が進んでいる。

3-1 関東甲信各県の地域組織問題

本部直属の地域組織は、支部以外に現在設置されていない。関東甲信の8県は、冠使用の県技術士会を名乗っていたが、昨年総合協力協定の締結にもとづく「提携」県技術士会に移行している。これらは、依然として任意団体扱いであるが、今回県単位の〇〇県支部として統括本部直属（現在の本部の名称変更予定）の地域組織となる予定。ただし理事の枠は設けないこと、地域組織には総会を設けないこと（業務報告会等の名称案がある）、地域組織には会長職を設けない方針であることから〇〇県技術士会の名称は用いないこと、地域組織の契約権限を認めないこと、地域委員会を設けること、経費の一部を統括本部が支援すること等が取り決められる。

3-2 支部管轄下の地域組織の問題

府県単位の地域組織を設ける。ただし北海道は、ブロック別を想定。名称は、九州本部〇〇県支部とする。各支部の代表幹事は、九州本部長が九州本部役員会の承認を得て選任し、会長に報告する。各県支部には、九州本部の業務を一部移管する部分について経費支援していくこと、総会を開催しないこと、地域組織設置の手続きは関東甲信地域と同様である。

既に九州支部でも支部規則・細則改正案を常任幹事会に諮って検討に入っている。九州支部の従来の全地区が正会員・準会員・賛助会員からなる新しい地域組織に移行し、CPD実施、社会貢献を中心とした事業活動に取り組むことになる。なお本活動に相応しない者は、別に有志による任意団体がNPO等に体制を分離することになる。

原稿募集

「技術士だより・九州」では、会員の皆様の幅広い意見を募集しています。

○声の広場 技術士として思うこと、珍しい、貴重な体験、やりたいこと、悩み、等々

○修習技術者の声 修習技術者の方の今後の抱負等の声

○私のチャレンジ 仕事、社会活動、趣味等で興味をもって取り組んでいること、これから取り組んでみたいこと・夢などホットな話題

○女性技術士の声 女性技術士として日ごろ感じられていること、業務の中で感じる女性技術士の役割、今後取り

組みたいことなどなど

○若手技術士の声

若手技術士として日ごろ感じられていること、業務の中で感じる技術士の役割、今後取り組みたいことなど

○熟練技術士の声

これまでの技術士としての活動を振り返り、印象に残っていること、最近思うこと、若い技術士に伝えたいこと、技術士会への要望等

詳細については、九州支部広報委員会へお尋ね下さい。

F A X : 092-432-4443

E-mail : pekyushu@nifty.com

委員会・部会報告

平成22年度 技術士第二次試験終了報告

試験管理委員長
原田 政太

(建設、総合技術監理・福岡)



技術士第二次試験は、総合技術監理部門が平成22年8月7日、それ以外の技術部門が8月8日に九州産業大学1号館において実施された。

21年度と同様に1号館の1階から5階の教室だけを使用したため、試験室と本部教室間の移動が非常にスムーズにおこなわれた。

1. 受験者数の推移

二次試験申込者数は、福岡では総合技術監理部門が497名それ以外の技術部門が3068名であり、21年度と比較すると、どちらの部門も約100名の増加(受験率77.4%)であった。

2. 試験実施にあたっての対策

①試験会場の事前準備について

九州支部では8月7日に総監で使用する4教室について、8月6日15:00から準備し、8月7日

は8:00集合とした。

試験実施マニュアルでは、試験本部員は8月7日は7:30に集合し教室の準備をすることになっていたため、本部担当員においては多少混乱した。

③試験監督員の若返り

試験監督の作業は教室を巡回したり、本部と連絡を取ったりして、結構ハードである。そのため22年度の試験監督員の若返りのために、技術士補の方に監督員をお願いした。

3. トラブル

- 1) 8日の原子力・放射線部門の問題が、3名分午前、午後ともに欠落していた。(総本部のミス)
→予備の問題をコピーして対処した。
- 2) 受験票を忘れた受験者→5名
- 3) 受験票の氏名記載ミス→1名、受験票の住所記載ミス→1名(総本部のミス)

4. おわりに

平成22年度技術士第二次試験福岡試験会場の業務も無事終了した。

いくつかのトラブルは発生したものの、大きな問題になる前に処置が完了し胸をなでおろしている。本部長、総括監督員の方々に感謝するものである。

平成22年度 第1回CPD報告

事業・CPD委員 **棚町 修一**
(建設、総合技術監理・福岡)



平成22年4月24日(土)、福岡商工会議所にて第1回CPDが開催されました。今回は、以下の4テーマについて講演が行われ、109名の方が受講されました。

1. 技術者倫理について

講師 中里 公哉氏

(九州大学工学倫理講師、九州航空宇宙協会会長)

技術者は「公衆の安全・健康・福利」を最優先して、専門知識を向上させ、誇りを持って社会の発展に貢献することが使命である。技術者として、自分

の責任を自分で理解し、どのようなケースに出会っても、自分で倫理的な適切な判断を下せるようにスキルを高める必要がある。そのためには、身近な具体的なイメージをつかむ事が理解しやすいとの示唆に富む講演でした。

2. 最新の宇宙輸送システムについて

講師 麻生 茂氏

(九州大学大学院工学研究院宇宙工学教授)

今年は日本の航空100年にあたるが、航空から宇宙へと発展する人類の活動領域が更に広がりを見せようとしている。このような状況を踏まえ、最新の宇宙輸送システムの状況、あわせて九州大学出身の若田光一宇宙飛行士の活動を紹介されました。

3. 江戸時代にもあった情報革命

講師 味酒 安則氏 (大宰府天満宮権禰宜)

現代のバブル崩壊と低成長、不況の時代という流れは、今より300年前にもあった。「元禄バブル」と

その後の歴史である。その時、「大店」の7割近くが潰れ3割が残った。その3割が何をしたかにこの時代を同じように生きる知恵が隠れている。そこには信頼の構築、情報を商業戦略に活かした経営があったことを紹介されました。

4. IT犯罪とセキュリティをいかに

講師 野見山寛之氏

(株)アステックインターナショナル)

本講演では情報技術の発達による恩恵とリスクを説明し、情報漏えい事件の傾向と対策、そして昨今のIT犯罪の変遷、PCなどの情報技術を利便に使いつつ、守秘義務を果たすための必要な対策についての興味深い講演でした。

平成22年度九州支部 第2回CPD報告

事業・CPD委員長 **長野 義次**

(農業、総合技術監理・北九州)

平成22年度九州支部第2回CPDが、7月24日(土)福岡商工会議所で開催された。演題の重要性・興味とタイムリー性も手伝ってか、ひさびさに約120名の参加者で盛会となり、梅雨明けの猛暑の中であったがバラエティに富む価値ある講演内容が4名の講師から会場の各位に熱気を帯びて伝わった。

1. 21世紀のエネルギー環境情勢における石炭クリーン利用(CCT)の期待と課題

講師：JSTイノベーションプラザ福岡館長(九州大学炭素資源国際教育センター特任教授) 持田 勲氏

21世紀の一次エネルギーの変遷から現在二次エネルギーは電気が選択されている。今後は利便性から液体燃料、燃料電池も提案され、政府はエネルギー革新技術の確立と事業化を目指している。

一次エネルギーとして、安価な化石資源の上手な消費は利用技術の成熟度合いからも有効である。脱石油のため世界中に埋蔵している石炭のCCTが①効率アップ、②バイオマスの添加、③発生CO₂の地中貯留、海底埋設の技術開発で期待される。

2. 電気自動車普及促進に向けての取組み

講師：九州電力総合研究所副所長

工学博士 谷口 俊二氏

CO₂排出量の2割を占める運輸部門の5割が家用自動車で乗用車からのCO₂排出量削減が急務である。エネルギー利用効率はガソリン車の1/3と高く、三世代を経て、各メーカーから市販車も提供される。

各種電池の中からもリチウムイオン電池を改良、開発に努めて、急速充電器の標準化等にも取り組み、充

電施設インフラ整備の配置拡充等の実証研究のほか、電気自動車の今後の展望としてはCO₂削減効果、V2H (Vehicle to Home)、スマートコミュニティが考えられるが、ソーラー発電への警鐘としての負荷(蓄蔵装置)としての電気自動車も紹介された。

3. メタン発酵消化液の液肥利用を中心とした資源循環型社会の構築

講師：農水省農村振興局整備部防災課長補佐

広域防災班長 技術士(農業) 岩下 幸司氏

持続可能な循環型社会への対応の一環として、農業工学(農業土木)の技術士として、8省庁所管の「バイオマス日本」事業の主管省である農水省の立場から説明あり、全国での「集落排水事業」末端処理に伴う汚泥処理を、ウエット系バイオマス活用の鍵として、メタン発酵技術の開発活用について解説あり。その結果として、メタン発酵消化液をメタン発酵液肥として水田や畑に施用する際の課題を4つに整理した。①導入の意義、②施肥設計と土壌への影響、③大量散布の効果的施用法、④計画手法と普及手法、について、主として九州での導入・活用事例中心の紹介があった。

4. 博多港物語、博多港の現状と将来像

講師：博多ふ頭(株)常務取締役、

長崎県立大学非常勤講師 逸見 廣治氏

日本は食料をはじめ、電化製品、エネルギーに至るまで海外に依存して、そのほとんどは港から入ってくる。また、輸出製品もそのほとんどは港から海外へ出てゆく。港は物流の結節点(ノード)で結節点の荷物の状況から経済状況が見えてくる。

物流は輸送、荷役、包装、流通加工、保管、情報であり、生産現場が海外へシフトしたことによる輸入超過の近年は国内産業の空洞化、国内における雇用問題、技術の海外流出、食料の大半を中国から輸入などの問題が発生した。空のコンテナ輸出を強いられている博多港には背後地やポートアイランドなど国際ハブ港湾の可能性が提案された。

業務開発委員会報告

副支部長・業務開発委員長
泉 館 昭 雄
(電気電子・福岡)



平成22年の主要事項を報告します。

イ、業務のみえる化と斡旋拡大——21年度から実施、継続します。

* CLIENTからその分野の専門家として評価され、指名される案件もあります。

* 全員が当事者意識を持ち、全員の目で、仲間の業務開拓したいものです。

ロ、第29回技術士業務開業研修会実施：主催は、本部業務斡旋委員会（阿部津和男委員長）で、九州支部業務開発委員会が全面的に支援するもの。7月2、3日、北九州市八幡東区東田 北九州産業イノベーションギャラリー 産業技術保存継承センター研修室で実施。

従来は28回とも東京開催。地方開催は初めてです。応募13名、12名研修実施。研修費一人39千円。主催委員会、受講生から大変好評でした。講師は本部から2名、支部5名。実行委員長大里義信業務開発委員。

講習内容は、受講生の野村利則技術士(情報)が、今

回の技術士便り・九州に掲載していますので参照下さい。

ハ、九州・国際テクノフェア—2010に、技術士会ブースを設置し、技術士と技術士会のプレゼンスを社会にアピールします。：各地区から募集した技術士の業務実績事例を含め、(社)日本技術士会、九州支部、およびその外部との関係をポスター、パンフレット等により技術士が説明します。技術相談にも対応する予定です。実行主体は、北九州地区、実行委員長末松業務開発委員。

期日：平成22年9月29日、30日、10月1日

場所：北九州市小倉北区西日本総合展示場

ニ、K-RIPは、日本技術士会九州支部を、専門家組織として認定されました。会員諸氏の更なる研鑽と積極的参加を願います。松原業務開発委員担当。

ホ、委員会業務パンフレット作成——委員会のミッション、外部諸機関との関係、H21年度の受託、依頼業務総括等です。吉田業務開発委員担当

ヘ、その他 九州経済産業局九州知的財産協議会幹事会、九州ニュービジネス協議会、2月会、2金会、大学発ベンチャービジネスコンペの各委員他に参加。

森川業務開発委員担当。

まとめ 専門性を高め、会員全参加で、仲間の業務を開発しようではありませんか。

町田貞徳先生を偲ぶ

北九州地区代表幹事
末松 正典
(機械、総合技術監理・北九州)



町田貞徳先生は、H22年7月13日に、入院中の赤間病院にて享年79歳で永眠されました。

町田先生は技術士としての資格を自らの業務に如何に活かしていくかについて熱く語られ、私ども後輩技術士の指導・育成をしていただきました。そればかりでなく、先生は大変な勉強家で、入院先の病院に泉館副支部長と一緒に「お見舞い」に伺っ

た時にも、今まで多くのビデオを記録し、それらの資料を一つにまとめておられること、そしてそういった資料を技術士会での研修に利用するようおっしゃっていただきました。

また、北九州地区での毎月の例会をはじめ、会合にはほとんど出席され、会合後の交流会ではお酒を酌み交わして歓談を楽しまれました。こういった日々の先生の笑顔と説得力のある話しぶりが昨日のように思い出されますが、それも適わなくなったことは非常に残念な気持ちです。

最後に技術士としての意志を貫かれたお人柄に敬意を表し、町田先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

青年技術士交流委員会報告

平成22年度
夏休み小学生自由研究教室
「西部ガス(株)
福北工場見学会」報告

青年技術士交流委員会会員
上原 志穂
(技術士補、応用理学・福岡)



1. はじめに

平成22年8月20日に第3回目となる「夏休み小学生自由研究教室」を実施しました。

この会は、技術に直接触れ合う機会を設けることによって、子供たちの科学や技術に対する興味関心を育てることを目的とした、青年技術士会のボランティア活動です。

今年は西部ガス(株)の福北工場を見学し、身近なエネルギーがどのように作られ家庭に供給されているか、ガスとはどのような物なのかを体感できる内容で、一般応募者38名(青年会員9名)と盛況な会になりました。

2. 見学会の内容

西部ガス(株)の福北工場では、-162度に冷却した液体状のガス(LNG)をマレーシアから輸入し、各家庭で使用できる状態にしています。見学会では工場の概要やガスの基礎知識を工場職員の方々に説明して頂き、主要設備を見学ながら更に詳しく説明をして頂きました。

-162度の液化ガスを使った実験見学では、室温で気化したガスに火がついたり、液化ガスに浸した花が凍って手で砕けたりする様子に、大人も子供も歓声を上げていました。

自由研究レポートを作成する子供達から出る質問に答えたり、レポートのヒントをあげたりといった交流もあり、楽しい一日となりました。

3. 見学会を終えて

理科離れや技術者の減少が社会問題化していますが、今回の交流を通して「理科離れ」というより技術と身近に触れ合う機会がなく、興味の対象外になっている気がしました。

技術は、科学と知恵が混ざり合ったとても面白い物で、実際に触れれば自然に興味湧いて来るものです。このような活動が、子供達にとってその第一歩になって欲しいと願っています。



工場見学の様子



LNG地下式タンク



子供達の自由研究にアドバイスする青年会員



見学後記念撮影

地方で初開催！ 第29回技術士業務 開業研修会受講報告

野村 利則

(情報工学、総合技術監理・北九州)



7月2日(土)・3日(日)の2日間、北九州イノベーションギャラリー・スタジオ(KIGS)において「技術士業務開業研修会」が開催され、8名の講師の先生方よりご講演いただき、私も13名の受講生の一人として受講いたしました。本研修会は、これまで中央(東京)で開催されていましたが、今回、初めての地方開催となり、九州支部が選ばれました。

[カリキュラム]

7月2日(土)

- 技術士業務開業について
(泉館 昭雄 先生(電気電子))
- 技術コンサルタント事務所設立・運営にあたっての法律と税務知識など
(阿部 津和男 先生(機械))
- 営業体験 (山田 伸雄 先生(建設))
- 業務開拓 (松原 好直 先生(上下水道))

7月3日(日)

- 地域における業務獲得の実績と教訓
(大里 信義 先生(化学))
- 営業体験 (宮田 守次 先生(金属))
- 業務開拓と海外業務 (馬縹 宏 先生(機械))
- 総合体験 (沼尻 健次 先生(機械))



研修会・受講風景

初日の最初は、泉館先生よりご自身の実績を踏まえて、技術士業務開業の意義と九州支部の動向についてお話いただきました。開業は「専門者としての能力を発揮し、生計を支え、構える場」であり、日本の技術者のモデルになることであることが示されました。

次に、阿部先生より開業の目的として「自分の能力を社会に役立てる」(喜び)、「収入を得る」(生活

のはり)、「利益を得て納税する」(社会を支える)ことが示されました。そして、経営するための具体的な知識項目として体験に基づき法律と税務をご教授いただきました。

続いて、山田先生より「企業内技術士から独立技術士へ」と題し、開業時の立ち位置として個人事業か、法人へ発展させるのか、その方向性の決め方について、ご自身の経験に基づきお話いただきました。

1日目の最後は、松原先生より「企業人から個人へ、生涯現役を目指して！業務開拓」と題して、サラリーマン時代の技術修得から現在に至る過程、今まさに進めている業務開拓活動としての各種団体との連携、各種地域支援活動についてお話いただきました。

2日目の最初は、大里先生より地方において開業する場合のメリット・デメリットについてお話いただきました。とくに営業活動を積極的に行い、そして人とのつながりを大切にしなければならないことを生々しいご体験から伺うことができました。

次に、宮田先生より「見果てぬ夢を追いかけてⅡ」と題して、現在の株式会社設立に至った経緯を熱く語っていただきました。「人生に夢があるのではなく、夢が人生をつくるのだ！『知恵と勇気でこれらを大切に生かす』」、すなわち情熱を持ち続けることこそが大切であるということをお教えいただきました。

続いて、馬縹先生より独立開業前に本研修にて得た内容と実際に開業し、体験して分かったこととの乖離についてお話いただきました。この中で最も難しい業務開拓方法を実例でお示しいただき、とくに海外業務における留意点について実体験に基づき、その反省点としてアドバイスをいただきました。

最後に、沼尻先生より定年退職後、複数の企業に入り体験された産学官連携や大学における人材育成活動を通じた技術士業務についてお話いただきました。ここで重要なことは、独立開業ではなく、信頼を勝ち取り相手先から必要とされる技術者となることが重要であることをお示しいただきました。

2日間を通して、人とのつながりを大切にして信頼関係を築くこと、積極的に自分をPRして行動することが技術士業務を進めるうえで重要であることを再認識することができました。また、専門技術だけでなく周辺知識や法律、財務会計の知識も必要であることなど、多くの貴重なノウハウをいただきました。

みどり研究部会・福岡地区

合同現地研修会

「安全で豊かな食づくり」

みどり研究部会幹事

(美しい豊かな村づくり班)

福岡地区幹事 **吉木 久人**

(農業・福岡)



平成22年8月25日、「安全で豊かな食づくり」と「支部CPD研修の講演の現地に行こう」を柱に、「農商工連携」と「農地・水・環境保全対策」をテーマに選り現地研修会を開催しました。

その研修概要は次の通りです。

(1) 「農商工連携の実例、グラノ24Kぶどうの樹」

(ぶどうの樹・代表取締役社長・小役丸秀一)

農商工連携は地域の農林水産業と商工業との連携を強化し、その相乗効果により地域の活性化を図るもので、「ぶどうの樹」はその優良事例として高い評価を受けています。

「自然の恵み（地元生産者の旬の食材、一次産業）」に「人の技（農産物の加工、二次産業）」で付加価値

を付け「おもてなし（特色のあるレストランや食育体験教室等、三次産業）」で「食の輪、地域の和」を目指しています。地域との連携や施設のリニューアルなど絶えず新しいものを求めて進む姿を見学しました。

(2) 「農地・水・環境保全対策、宗像市名残地区」

(宗像市名残みどりの会・会長 谷口啓二)

全国の集落では高齢化や混住化が進行し、農地や農業用水などの資源を守る地域の「まとまり」が弱まっている中で、国民の環境への関心が高まり、良好な農村環境の形成や環境を重視した農業生産への取り組みが求められています。

これらに対応するために、農林水産省では平成19年度から「農地・水・環境保全向上対策」を実施しています。名残地区は国に先駆けて行われた福岡県の対策事業の時点から取り組みが行われ、「水源を守り河川を汚さない」「安全な作物を生産する」をモットーに、農家だけでなく集落全体で農村の環境対策に取り組が行われています。その努力に対し本年3月に農林水産大臣賞が贈られました。研修では参加者28名に対し地元から5名が出席し、説明の後熱心な意見の交換も行われました。

会員ニュース

☆(社)日本技術士会（九州支部）入会

(平成22年5月)

(所在地)(区分)	(氏名)	(部門)	(勤務先)
佐賀 正会員	福岡 稔浩	機械	シグマテック福岡自動化機械設計室
福岡 正会員	溝田 安彦	電気電子	西部電気(株)マテハン事業部生産部
福岡 正会員	村松 繁	化学	(株)三菱化学科学技術研究センター技術本部開発センター分析グループ四日市分析センター機能解析グループ
福岡 正会員	泉山 遼	建設	セントラルコンサルタント(株)九州支店技術部
福岡 正会員	漆谷 晃樹	建設	(株)建設技術研究所九州支社
佐賀 正会員	江洲 勉	建設	日本工営(株)広島支店営業企画部
福岡 正会員	竹原 哲郎	建設	日本工営(株)福岡支店技術第二部
福岡 正会員	塚原 俊一	建設	日本工営(株)福岡支店
福岡 正会員	益田 宗則	建設	日本工営(株)福岡支店技術第1部河川水工グループ
福岡 正会員	室井 辰盛	建設	日本工営(株)福岡支店技術第2部
福岡 正会員	安場 敦志	建設	日本工営(株)福岡支店技術第2部
長崎 正会員	藤村 幹治	農業	扇精密(株)諫早支店

福岡 正会員	石田 貴広	森林	日本工営(株)福岡支店
佐賀 正会員	田島 靖久	応用理学	日本工営(株)福岡支店佐賀営業所
熊本 準会員	田中利浩(土)	農業	アジアプランニング(株)設計技術部
福岡 準会員	小田幸広(土)	上下水道	(株)九電工環境資源事業部
福岡 準会員	田中憲一(土)	建設	(財)九州環境管理協会環境部

<平成22年6月>

(所在地)(区分)	(氏名)	(部門)	(勤務先)
福岡 正会員	村上 洋	機械	九州産業大学工学部
佐賀 正会員	片淵 太雅	建設	(株)親和テクノ佐賀支店
福岡 正会員	小林 紀文	建設	玉野総合コンサルタント(株)福岡支店技術部
福岡 正会員	竹嶋 寛	建設	玉野総合コンサルタント(株)福岡支店技術部
熊本 正会員	松島 智雄	建設	玉野総合コンサルタント(株)福岡支店技術部
福岡 正会員	峰松 睦	建設	日本工営(株)福岡支店技術第2部
大分 正会員	吉岡 治	建設	東洋測量設計株式会社設計部
福岡 準会員	高木麻衣(土)	建設	パシフィックコンサルタンツ
福岡 準会員	道家健太郎(土)	建設	日本工営(株)福岡支店技術第2部

賛 助 会 員

……………[福 岡]……………	(株)松本組	大洋測量設計(株)
いであ(株)九州支店	(株)唯設計事務所	東洋測量設計(株)
(株)エスケイエンジニアリング	……………[北九州]……………	西日本コンサルタント(株)
(株)カミナガ	(株)太平設計	(株)日建コンサルタント
(株)九州地質コンサルタント	(株)都市開発コンサルタント	日進コンサルタント(株)
(株)建設環境研究所福岡支店	(株)松尾設計	松本技術コンサルタント(株)
(株)サンコンサル	山九(株)	……………[宮 崎]……………
新地研工業(株)	……………[佐 賀]……………	(株)アップス
第一復建(株)	(株)九州構造設計	九州工営(株)
大成ジオテック(株)	新栄地研(株)	(株)弓場水コンサルタント
大和コンサル(株)	西日本総合コンサルタント(株)	(株)ケイディエム
(株)高崎総合コンサルタント	日本建設技術(株)	(株)国土開発コンサルタント
(株)東京建設コンサルタント九州支店	……………[長 崎]……………	正栄技術コンサルタント(株)
東邦地下工機(株)	扇精光(株)	(株)白浜測量設計
西鉄シーイーコンサルタント(株)	(株)実光測量設計	南興測量設計(株)
西日本技術開発(株)	大栄開発(株)	(株)西田技術開発コンサルタント
西日本コントラクト(株)	大洋技研(株)	(株)東九州コンサルタント
日鉄鉱コンサルタント(株)九州支店	西日本菱重興産(株)	南日本総合コンサルタント(株)
日本工営(株)福岡支店	……………[熊 本]……………	(株)都城技建コンサルタント
日本総合コンサルタント(株)九州支店	(株)九州開発エンジニアリング	(株)宮崎産業開発
日本地研(株)	……………[大 分]……………	(株)ロードリバーコンサルタント
(株)福山コンサルタント	九建設計(株)	……………[鹿 児 島]……………
(株)富士ピーエス本店	九州特殊土木(株)	(株)久永コンサルタント
富洋設計(株)九州支社	協同エンジニアリング(株)	
平和測量設計(株)	ダイエーコンサルタント(株)	

編 集 後 記

今年の夏は「猛暑日」「熱中症」という言葉が連日聞かれ、年々暑さが厳しくなっている状況を身体で感じました。国内の気温上昇の他にも、海水温暖化により南の生物の北上や台風発生の際の北上など明らかに日本の亜熱帯化を予感させる事象が起きています。一人一人がこのことをしっかり受け取め、環境の変化に対して仕事や日々の生活でどのようなことを心がけていくべきかを考え、できることから実践していくことが急務になってきています。

町田貞徳先生の訃報に接し、九州地方技術士センター時代の熱心な技術士受験指導、今でも重宝している会員名簿の発行に尽力された姿が思い起こされます。謹んでご冥福をお祈りいたします。(棚町)

発 行：(社)日本技術士会九州支部

〒812-0012 福岡市博多区博多駅中央街7-1
(シック博多駅前ビル203)

九州支部： ☎(092)432-4441

FAX(092)432-4443

E-mail: pekyushu@nifty.com

九州支部ホームページURL：

<http://www.pekyushu.com/>

センター： ☎/FAX(092)432-4443

印 刷：(株)川島弘文社